発掘成果から見る下宿

中野光将（清瀬市郷土博物館）

はじめに

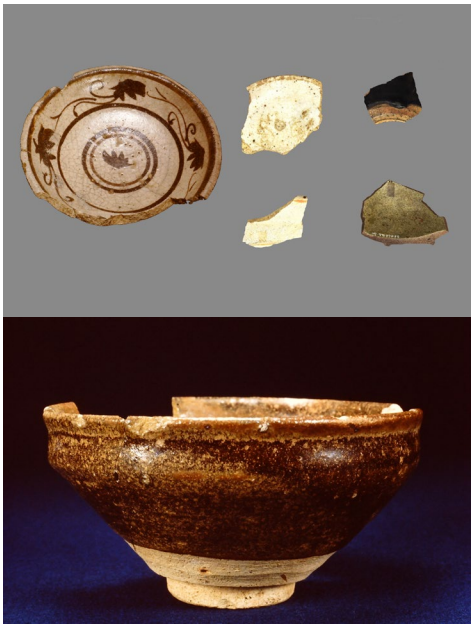
下宿内山遺跡は、現在の清瀬市下宿3 丁目に所在している清瀬水再生センター建設に伴い、昭和51年（1976）～昭和57 年（1982）にかけて、約21 万㎡におよぶ広大な敷地の発掘調査によって姿をあらわした遺跡です。

江戸時代の清戸下宿村に該当するこの遺跡からは、江戸時代初期の旗本陣屋や17世紀末以降を中心とする14軒の屋敷あるいは用水路や水田の跡など、それに伴う大量の陶磁器が見つかりました。

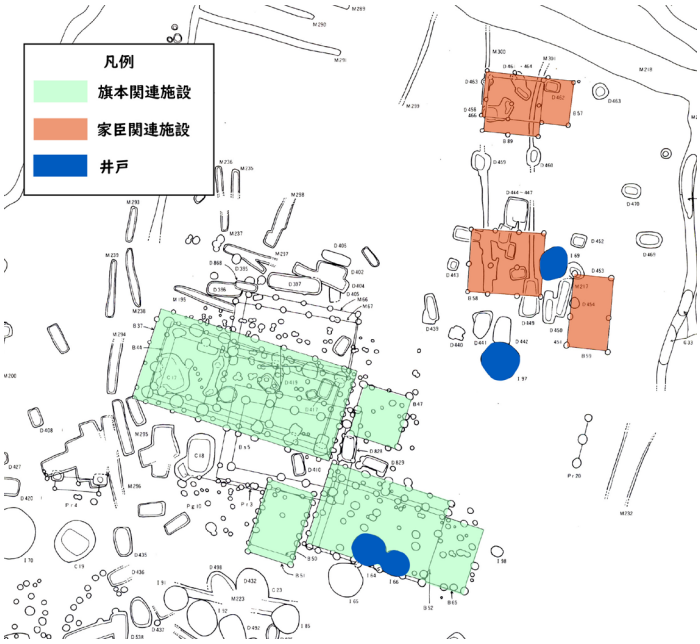
本講演では、江戸時代の発掘成果を紹介していきます。

1．江戸時代初期の旗本陣屋の調査成果

下宿内山遺跡内には、昔から「陣屋」と呼ばれている場所が存在しており、その場所から江戸時代初期の大型堀立柱建物・井戸などが見つかっています。これらの建物は、文献や字名などから、天正19年（1591）～寛永11年（1634）頃まで、この地を統治していた太田清政と助重父子によって築造された陣屋に伴う可能性が考えられています。



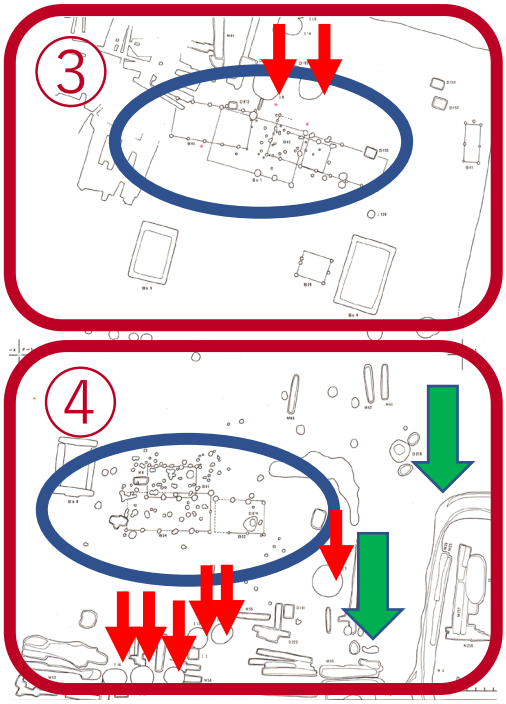
旗本陣屋出土遺物



旗本陣屋遺構配置図

2．江戸時代における14軒の農家の発掘調査成果

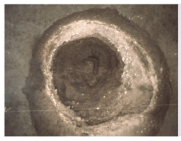
下宿内山遺跡で確認された農村の屋敷の全ては17世紀末頃（1680年代）に誕生しています。発掘調査の成果から屋敷である掘立柱建物、その周辺に井戸、ゴミ穴や作業場としての土坑などが共通して組み合わさっていた事が解りました。そして、屋敷地の外には畑地、その畑地に向かう農道、農作業に伴うと推定される貯蔵穴の存在を復元することができます。屋敷付近の井戸や土坑からは、陶磁器・漆器・木製品などの当時の生活を彷彿とさせる多種多様な遺物が出土しています。



掘立柱建物・溝・井戸

I62(井戸)

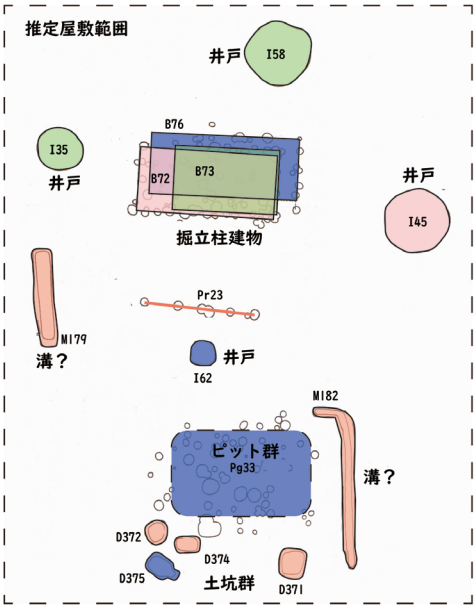
Pg33(ピット群)
出土遺物



I35(井戸)

D375出土遺物

D372・374・375(土坑)



⑩屋敷地遺構配置図

（『幕藩体制下の農民の居宅―東京都清瀬市下宿内山遺跡で調査された江戸時代の遺構群―』を基に作成、一部改変）

17世紀末葉～18世紀中葉
18世紀末～19世紀初頭
19世紀前葉～中葉
江戸時代（年代不明）

I45(井戸)

I58(井戸)

江戸時代の下宿内山遺跡から出土した陶磁器は、その多くが飲食器が中心となっています。特に、18世紀中頃（1750年代以降）に出土量が増加しています。これら、陶磁器は、使われなくなった井戸や溝、あるいはごみ穴から見つかっています。そして、幕末に近づくにつれて器種のバリエーションを増加していく傾向が見えます。

さらに、飲食器を細かく見ていくと、①碗、擂鉢の出土量が多く、②江戸市中でも見られる器種が大半だが、徳利は数が少ない③焙烙は、平底が大半で囲炉裏用と推定される特徴としてあげられます。

碗・皿・鉢・擂鉢・片口・壺・土瓶・徳利・燗徳利

焙烙（ほうろく）・灯明皿・灯明受皿

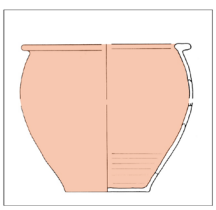
3. 江戸時代以降における14軒の農家の発掘調査成果

明治時代以降の下宿内山遺跡から、屋敷地は江戸時代とほぼ同じ場所で昭和40年代頃まで増改築を繰り返していたことが解りました。屋敷は、明治時代に入ると、掘立柱建物から石土台建物へ、井戸もコンクリート製の井戸枠や木枠の上にコンクリート補強のように変化していました。

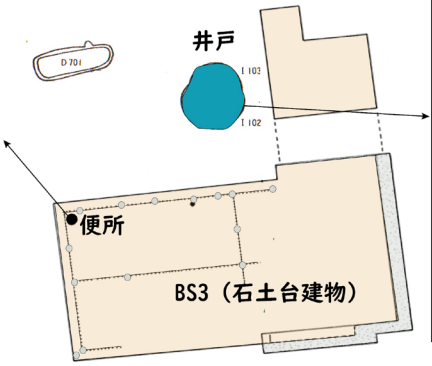
出土遺物は、明治時代以降の技術を持つ陶磁器に加えて近代の象徴であるガラス製品などが出土しています。また第二次世界大戦頃の防空壕やその時代の陶磁器も見つかっており、遺構や遺物からも徐々に農村が近代化し、当時の情勢に合わせて人々が順応していった事を知る事ができます。

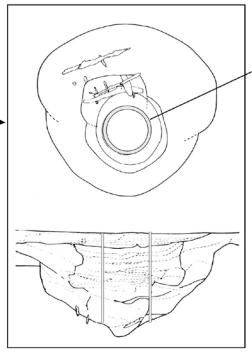
明治時代以降の陶磁器

ガラス製品



常滑産の大甕





I103（井戸）

屋敷地⑭における明治時代以降の遺構配置図

防空壕

統制陶磁器の表記

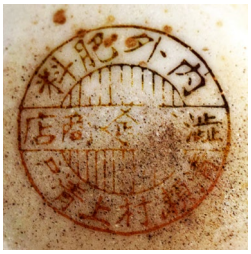
統制陶磁器

4.発掘調査から見た近代農村の生活

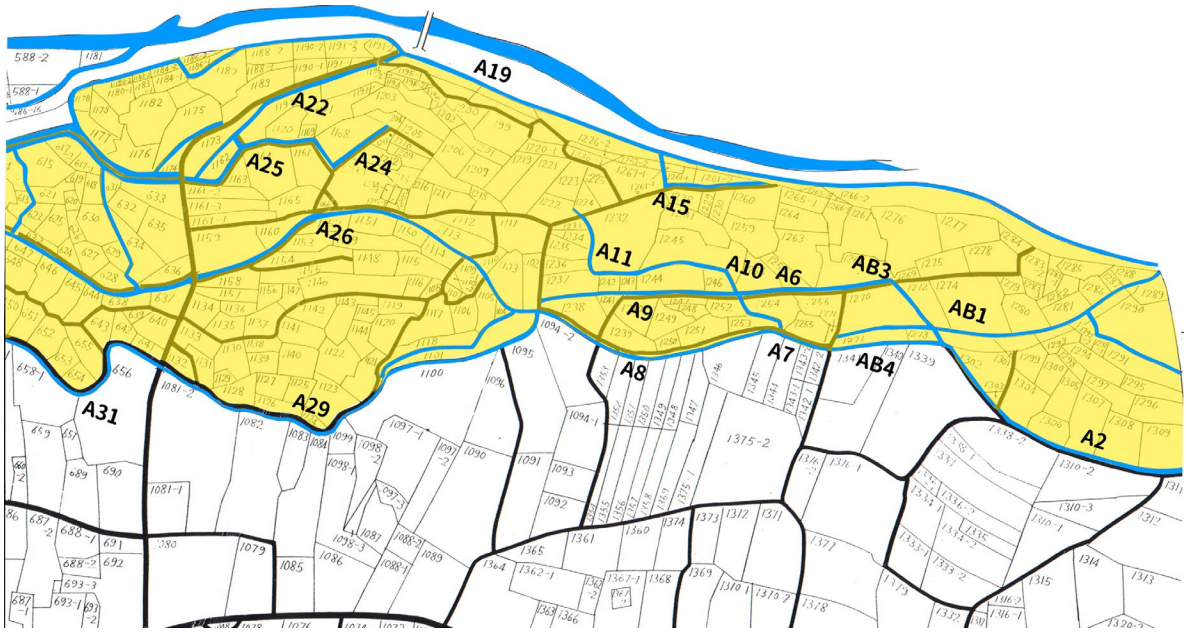
下宿内山遺跡の各所からは、肥料や麦の品種などを販売していた店舗名のある明治 20 年代後半～昭和初期にかけての湯呑み茶碗が数多く見つかっています。その店舗は、野塩・上清戸などの市内や、近隣である埼玉県志木市・朝霞市・所沢市などがあり、、当時の肥料流通の一端を垣間見ることができます。

また、昭和 30 年代頃の下宿内山遺跡付近の地籍図に発掘調査で見つかった用水跡と田園を重ねるとほぼ一致することが解りました。そして、これらの用水からは、17世紀末～昭和 30 年代頃まで遺物が数多く見つかっています。このことから、この用水・田は少なくともに 18 世紀頃に存在し、その後約 250 年間使われ続けたと考えられます。

農業に関連する銘のある陶磁器



東京都
清瀬市　野塩　野塩食糧企業組合　　上清戸　渋谷商店
埼玉県
朝霞市　種専門店　種六商店
志木市　浅田肥料（浅田商店）所沢市　上安松　斎藤精麦所



昭和30年代の下宿内山遺跡地籍図に重ねた発掘で確認された水田・用水

発掘で確認された水田・用水　　**A29（用水）で出土した陶磁器**

おわりに

江戸時代以降の発掘調査成果である、①江戸時代初期の旗本陣屋、②江戸時代～昭和の農村を中心に述べてきました。

この遺跡は、発掘調査によって江戸時代～昭和40年代の約285年にわたる農村の歴史が確認でき、かつほぼ断絶することなく連続していたことも判明した貴重な遺跡です。この成果を基礎に新たなる清瀬を含んだ近郊農村の歴史の復元が期待されます。